

# 王道淵の内丹説

日比野 晋 也

## Wang Dao Yuan's Neidan Method

HIBINO Shinya

This article analyses the neidan (内丹) method of Wang Dao Yuan (王道淵), who was active from the end of the Yuan (元) dynasty to the beginning of the Ming (明) dynasty. An analysis of his writings shows that the neidan (内丹) method he preached was a conventional neidan (内丹) method based on Wu Xing Zhuan Dao (五行転倒), and that the names of Wang Zhong yang (王重陽) and other members of Bei Zong (北宗) are not mentioned at all. In addition, although it is known that Wang Dao Yuan's ancestor was Li Dao Jun (李道純), he did not receive direct instruction from him, and from the contents of his writings, it seems that he practised neidan (内丹) on his own while familiarising himself with Li Dao Jun's writings. This must be considered in light of Li Daojun's influence in the South at the time, and at the same time indicates the possibility that his writings on the art of neidan were published and circulated. It should also be noted that we should be cautious about lumping them together as Taoists of the Quan Zhen sect (全真教).

Keywords: Quan Zhen Sect, Wang Dao Yuan, “*Huan Zhen Ji*”, Neidan

キーワード：全真教、王道淵、『還真集』、内丹

### はじめに

金末に王重陽（1112-1170）が開いた全真教は、直弟子である丘処機（1148-227）がチンギス・カンの信任を得ると勢力を急速に拡大し、遂に北方の道教を管轄するまでになった。しかし、至元年間に行われた仏道論争に敗北し、勢力は衰えたとされる。そのような中、元が中国を統一すると、それまで交流が盛んではなかった江南と盛んに交流が行われるようになる。すると江南に自らを全真教徒であるとする道士たちが出現する。その代表的人物が李道純や陳致虚（1290-?）である。彼らによって王重陽ら北宗と、張伯端を祖とする南宗が一つに結び付けられていき、全真教は中国全土に広がっていくのである<sup>1)</sup>。

本稿ではそのような点を踏まえ、王道淵という道士を取り上げてみたい。彼は元末から明初に活躍し

---

1) これらについてはこれまで数多くの研究がある。例えば次のものを参照。横手（1990）、松下（2019）、張（1995）。

た人物であり、著作もかなりの数が『道蔵』に収められている。また、彼の著作の中に見える道統意識においては、李道純の系譜に連なる人物と考えられる。李道純が活動していた際、多くの系譜が作られるようになった。しかし、よく知られているように陳致虚が結びつけた系譜には李道純の名は登場しない。このように見てくれば、王道淵の思想分析を行うことは、陳致虚以外の同時代における内丹術の状況を理解し、元末明初における内丹思想の基盤を理解する上で重要なものであるし、更に李道純の思想がどのように継承されていったのかを理解するためにも重要な作業であろう。以上の点をふまえ、本稿では次のような構成で王道淵の思想を分析したい。まず彼の著作である『還真集』を主な検討材料とし、その内丹思想を明らかにする。次に師と仰ぐ李道純及び同時期に活動していた陳致虚の内丹思想と比較し、当時の江南における内丹思想の基盤を明らかにする。最後に王重陽を始めとする北宗をどのように理解していたのかも見てみたい。なお予め述べておくと『道蔵』は文物出版社・上海書店・天津戸籍出版社（1994年）による影印のいわゆる三家本に拠る。出典については、三家本の冊数を「道蔵第〇冊」という形で引用箇所の後ろに明記し、本文の該当箇所についてはA-Bの形で示した。Aは三家本の巻数、Bは三家本の頁数を指す。

## 第一章 王道淵の内丹の過程

まず王道淵の内丹の過程を明らかにしておきたい。既に述べたように、彼の著作の多くは現存しており、その内丹思想の大部分を理解することができる<sup>2)</sup>。

その前に王道淵がどのような人物なのかについて確認しておきたい。彼自身の著作以外に伝記資料には乏しいため多くのことはわからないが、『還真集』（道蔵第二十四冊）の序文には次のようにある。

南昌修江混然子、以故姓博学、嘗遇異人得秘授、猶勤於論著。予読其言久矣、間会於客邸、匆遽未遑尽究。今春、吾徒袁文逸自吳還、持其所述還真集、請一言。予味之再、信達乎金液還丹之旨。其顯微敷暢、可以明体会用矣。使由是而修之、雖上遡紫陽、清菴、亦未知孰後先也。（二十四—九十七中）

この序文は明初の正一教第四十三代目天師張宇初によるものであり、当時の正一教との思想交流の一端を示すものとして興味深いものである。これによると王道淵は南昌修江（現在の江西省九江市修水県）の出身であり、幼い頃より博学であり、神仙と遭遇し、「秘授」を得たのだという。また『還真集』を読んだ張宇初はその内容を張伯端、李道純に連なるものとして称賛している。

ここで注目しておきたいのは、この序文だけを見ると、王道淵は実際に李道純に師事したということが書かれていないという点である。それどころか、全真教北宗に関係する人物も出てこず、「異人」と記

2) 王道淵の内丹思想については張曉粉（2003）、同（2008）参照。また他にも蜂屋（1998：200-208）が丘処機の「青天歌」の解釈に王道淵の註を用いている他、『入薬経』の理解のためにも王道淵の著作は用いられている。たとえば秋岡・垣内・加藤（2018：142-152）の「入薬経」の項目参照。

載されているのみというのも注目すべきである。ところが王道淵の著作である『還真集』を見てみると、祖師として李道純の名が登場する。「口訣」と題されたものには「祖師云、既知下手処、便従下手処做将去」（二十四－九十八中）とあり、李道純の『中和集』（道蔵第四冊）に同様の文章がみられることから、王道淵は李道純の著作を見ていたと判断できよう<sup>3)</sup>。このような点を踏まえると、王道淵の師弟関係について、次の3点の可能性が考えられよう。1つ目は実際に李道純に師事し、修行を積んだという可能性。2つ目は李道純を開祖と仰ぐ道士のもとで修行を行っていたという可能性。3つ目は王道淵自身が李道純の著作を用いて修行を行い、弟子だと称していたという可能性である。筆者としては3つ目の可能性が高いと考えたい。理由として、先程取り上げた序文の最後にわざわざ「雖上遡紫陽、清菴、亦未知孰後先也」と記しているからである。「清菴」は李道純の号でもあり、もし実際に李道純に就いて修行を行っていたならば、李道純に師事したという形で記すのではないだろうか。またもし李道純を祖とする道士の系統であるならば、李道純が直接の師ではない場合、李道純から王道淵に連なる系譜を述べるのではないかとも思われる。しかしそれが書かれていない以上、仮に李道純一派と呼べる派閥があれば、王道淵はその派閥に所属していなかったと考えられる。以上の理由から筆者は、王道淵は李道純の著作を始めとする内丹術の文献に親しみながら、概ね独力で内丹を修めていた人物だと考えておきたい<sup>4)</sup>。

このような系譜意識を踏まえた上で、彼の内丹思想について分析を行いたい。既に指摘されていることであるが彼の内丹思想は『悟真篇』をはじめとする南宗の内丹道の影響が強いとされている<sup>5)</sup>。その詳しい方法は『還真集』に記されているため、それらを主な検討材料とし、それを補うために『崔公入藥経注解』（道蔵第二十四冊）も用いて検討する。

まず内丹の修行を行う上で重要な要素である「性」と「命」についてどのように考えていたのかを見てみよう。『還真集』中巻にある「性説」と題された文章には次のようにある。

性也者、先天一点至靈、人身中元神是也。此靈在父母未生以前、不曾添些、居父母已生之後、亦不曾減些。本自円成、亦無余欠。是故人之生也、性無有不善、而於氣質不同、稟受自異。故有本然之性、有氣質之性。本然之性者、知覺運動是也。氣質之性者、貪嗔痴愛是也。是以上智之人、了悟本性、寸絲不掛、万法昭然、中智之人、半明半惑、操之則存、舍之則亡。下智之人、神無所守、隨念生情、貪著其事。（二十四－一〇五中）

3) 李道純の『中和集』には次のようにある。

「予前所言金丹之大槩、若向這裏具双眼、方信大事不在紙上。其或未然、須知下手処。既知下手処、便従下手処做将去。」（四一五〇二下）

4) 王道淵の道教史的な位置づけは中国と欧米では異なるようである。たとえば胡（1995：186）では王道淵を「元末明初南昌修江人。全真道士。号混然子、宗全真北宗先性後命、性命双修之旨。」とし、明確に全真教の道士であると見なしている。これに対して Schipper（2019：1279）には「Although generally considered to have belonged to the Quanzhen order, Wang is not mentioned in the Quanzhen histories we know, and his work does not explicitly mention any Quanzhen affiliation.」とあり、全真教徒という見方に疑問を呈している。

5) 注2所掲張（2003）参照。

ここでは「性」は先天の至霊であり、体内に存在する「元神」であるとする。そのために人の生というものは本来円成の状態であり、不善はないのだが、気質は異なるのだという。そのような理由から「本然の性」と「気質の性」があるのだと王道淵はいう<sup>6)</sup>。ここで述べられる「本然の性」とは「知覚運動」であり、「気質の性」とは「貪嗔痴愛」であると定義している。

ここでもう一つ注目しておきたいのは、「上智」・「中智」・「下智」といった修行者の段階に応じて説明をしている点である。これは李道純が用いている説明の方法と似通っている<sup>7)</sup>。この時期においてはこのように修行者の素質や段階に応じて説明の方法を変えると行ったことは広く行われていたと考えられる。他にも中巻にある「性命混融論」と題された文章には次のようにある。

性者、人身一点元霊之神也。命者、人身一点元陽真氣也。命非性不生、性非命不立。父母未生已前、靈含空氣而已、朗朗澈澈、無欠無余。父母已生之後、一元真炁居身兩腎中間、空玄一竅之内、命於此立、性亦寄体于此。立性立命、故曰天心、是曰天命之謂性。性乃為人一身之主宰、命乃為人一身之根本。……夫修還丹之道、不過以神氣混合、而復本来性命之全体。性体為乾、命体為坤、乾元屬金、坤元屬土。乾金居坤土而藏、子母相守、以性為子、以命為母。丹經所謂讓他為主我為賓、此所以借身為主之用。易曰、大哉乾元、万物資始。性也、至哉坤元、万物資生。命也。道德經乃曰、常無欲以觀其妙。性体乎乾、常有欲以觀其微。命用乎坤。乾坤為易之門戶、実為性命体用之根宗也。性命即神氣也、神氣即鉛汞也、鉛汞即坎離也、坎離即日月也、日月即水火也。水火既濟、妙合而凝、此乃性命混融之道也。当性命混融之時、心空朗澈、無形無名、無体無用。当性命發越之際、陽動陰分、有形有名、有体有用。於此当行靈宝度人之經、則体用遂分内外。内則性居中宮而斡運、曰体、外則情運斗柄以循環、曰用。存之以誠、用之以真、自然丹結於鼎、養成聖胎。如嬰兒之在母腹、十月氣足、脱胎神化、身外有身、真人出現、至此性命双修之大事畢矣。凡諸学道至人、參禪高士、不可執著、必以性命双修方成大事。(二十四—一〇三下~一〇四上)

ここでは「性」は「元霊の神」であり、「命」は「元陽真氣」であるとし、互いに存在しなければ成立しないことを述べる。王重陽らも取り上げる「父母未生已前」の時には靈含なる気のみが存在するが、「父母已生之後」の後は両腎の間に真氣が生じ、それが「命」であるという。そしてそれと同時に「性」も生じるとする。そして「性」は「一身之主宰」であり、「命」は「一身之根本」という。これらを踏まえた上で様々な要素を王道淵は関連付けていく。

まず「性=乾=金=子」、「命=坤=土=母」という配当を用いている。いうならば「命」である肉体に「性」である体内神が蔵されているという認識なのだろう。そこから彼は「性命=神氣=鉛汞=坎離=日月=水火」という形で、これを内丹の隠語に読み替えていく。そしてこの「性」と「命」を「混融」

6) これについては既に横手氏が「先天の気」、「後天の気」という概念を元に李道純及び王道淵との関係について分析を行っている。本稿でもこの形に従って述べる。これらについては横手(2005)を参照。横手氏はその中で、当時の道教において「本然の性」と「気質の性」や「先天の気」と「後天の気」という二項対立の考えが一般的に用いられていたと述べる。

7) 注1所掲横手(1990)、松下(2021)参照。

させた「性命混融之道」を内丹術とする。そして混融が行われている時、心は澄んだ状態であり、形・名・体・用の全てが存在しない。しかし「性命」が発動すると、陽が動くことで陰とわかれ、形・名・体・用が存在するようになる。かくして『靈宝度人經』を修行すれば、丹が鼎の中で結ばれ、聖胎となるのである。ここでいう聖胎とは金丹のことであろう。その金丹を十ヶ月かけて養うことで聖胎は「神」となり、体の外に出ることができる、いわゆる出神ができるようになり、真人となれるのである。こうして王道淵が説く「性命双修」を用いた内丹修行の過程は完成するのである。そしてこのような「性命双修」の方法は道を学ぶ人だけでなく、参禅をする人も行うべきであるという。このように元来禅から取り込まれた性説が、ここでは完全に内丹術のものとして理解されていることは注目しておかねばならない。いうならば「性命双修」とは内丹術の修行を指すものであり、禅に対しても優位に立つと考えていたのである。

以上の点を踏まえた上で、王道淵のより具体的な内丹の過程について分析を行いたい。これについては『還真集』上巻「金丹直指」が参考になろう。以下に全文を掲げる。

玄関一竅、在人身中。腎上心下、肝西肺東。不偏不倚、独立虚空。非内非外、元始之宗。無欲養性、有欲施功。搥開爐竈、鼓動巽風。雷轟海底、驚起港龍。火炎坎位、升上離宮。黃婆引婦、嫁与金公。三家相見、情意和同。丹凝九轉、滿鼎霞紅。勤採勤鍊、漸凝漸豐。綿綿固守、野戰防凶。靈胎養就、陽純氣沖。立功立行、名達上穹。脱胎神化、道妙無窮。（二十四—九十八下）

「玄関一竅、在人身中」とは金丹が生成される場所を示しており、それを中心として上（＝北）に腎、下（＝南）に心、西に肝、東に肺を配置している。これは内丹術における基本的な配置である<sup>8)</sup>。そして「無欲養性、有欲施功」という状態になると東の龍が起き、南側の離郷より火が生じる。水を示す北の句が見当たらないが、内丹術の原則に従えば、西を表す金（＝虎）が見え、中心にいる「黄婆」によって龍と虎が結ばれ金丹が生み出されるのであろう。生み出された金丹を「九轉」、つまり最上の丹にするまで育て上げることによって「脱胎神化」すること、つまり悟りを得ることができるとする。

王道淵は他にもさまざまな表現を用いて内丹の生成を説く。たとえば『崔公入藥鏡注解』の「鉛龍昇、汞虎降。驅二物、勿縱放」に対する注には次のようにある。

鉛者、坎中一点真陽、謂之龍也。汞者、離中一点真陰、謂之虎也。凡作丹之時、飛戊土抽坎中之鉛、木生火而炎、上昇泥丸、龍從火裏出、故曰鉛龍昇也。用己土攝離中之汞、金生水而流、下降丹田、虎向水中生、故曰汞虎降也。（二—八八三上）

ここでは「鉛＝坎（☵）中一点真陽＝龍」であり、「汞＝離（☲）中一点真陰＝虎」という説明がなされる。金丹が生み出される際は火から木が生じ、水が金を生み出すという「五行顛倒」の方法が説かれる。また、先程出てきた「黄婆」については同じく『崔公入藥鏡注解』の「托黄婆、媒姪女。輕輕地、

8) 秋岡・垣内・加藤（2019：44-63）参照。

黙黙舉」に対する注が参考になろう。

黄婆、姪女、皆強名也。黄婆者、坤土也、即戊己土也、又言意也。姪女、兌金也。兌為少女、金隱水中。凡作丹必托黄婆為媒、通姪女之情、以戊土藏火、火逼金行。当起火之初、受炁且柔、要当撥轉頂門闔振、從尾穴輕輕地黙黙而舉、須與火力熾盛、河車不可暫停、運入南宮復還元位、嫁与金公而作老郎。崔公苦口叮嚀、以謂世人不達還丹之旨、故喻托以黄婆媒於姪女、直欲世人曉此理也。悟真篇云、姪女遊行自有方、前行須短後須長、帰来卻入黄婆舍、嫁箇金公作老郎。是也。(二一八八四下～八八五上)

「黄婆」は五行でいう「坤土」を示すものであり、方位では中央を示すものである。そして「姪女」は「兌金」を示すものであり、「金隱水中」という表現があることから、先程出てきた「虎」と同じ意味であることがわかる。そして金丹を生み出すためには必ず「黄婆」を媒とせねばならず、「姪女」と交わるためには「火」を用いる必要があるという。下段にその方法が説かれているが、これは先程確認した『還真集』の過程と同じであり、南から生じた火はここでは書かれていないものの、「鉛龍昇、汞虎降。驅二物、勿縱放」に対する注を踏まえるならば龍となって「黄婆」の働きにより「姪女」である虎と交わり金丹が生み出されるのであろう<sup>9)</sup>。

ここまでの流れをまとめると、王道淵が説く金丹の生成方法は伝統的な内丹術の流れの上にあるものであり、五行顛倒や比喩を用いて説かれたオーソドックスなものであることがわかる。次に王道淵が強調する生み出した丹を養育する「火候」の過程について述べてみたい。

「火候」について、まず『還真集』上巻の「週天火候図」を見てみよう。

夫週天火候者、乃乾坤闔闢、陰陽運化之機也。大則天地、小則一身、皆有生成火候之數。易云、一闔一闢謂之變、往来不窮謂之通。是以人之一身、呼則接天根、吸則接地根。一呼一吸、自合天地造化。此呼吸非口鼻之呼吸、乃内運一息之呼吸。是以前代祖師立言設象、誘引後之來者。至如龍虎經、參同契、火記六百篇、無非發明火候、實欲世人行此道也。故將一年簇在一月、將一月簇在一日、將一日簇在一時、將一時簇在一息。一息之工夫、進陽火、退陰符、奪三千六百之當氣、回七十二候之要津、產一粒黍米之珠、落于黃庭之中、空洞混合、梵炁凝真、結成聖胎、謂之符火還丹也。張紫陽所謂、不刻時中分子午、無爻卦内定乾坤。了真子曰、大藥三般精氣神、天然子母互相親。回風混合歸真體、煅煉工夫日日新。邵子亦曰、乾遇巽時觀月窟、地逢雷處躡天根。天根月窟閑來往、三十六宮都是春。此皆發明火候之理也。修真之士、縱然有三真不漏不行火候之功、尤屬於陰、終久只出陰神、不能出陽神也。呂純陽故有罈頭坯之説。且罈頭坯不經火煅、終為泥土、豈能堅固哉。人之有身、亦如罈頭坯也。若不行火候工夫、煅煉藥物、終不得形神俱妙、与道合真也。是以聖人伝藥不伝火、從來火候少人知。此祖師不伝之秘、非不伝也、唯在得人而伝也、豈易言哉。(二十四一〇一上～中)

9) 「黄婆」については三浦(2000)参照。

まず王道淵は火候を乾坤が衰えたり盛んになったりすることであり、陰陽の運化とする。そして「呼」は「天根」、「吸」は「地根」に接するとし、これらが合わさることで天地の造化が行われるのだと述べる。更に『龍虎経』、『参同契』といった歴代の内丹を説く経典を取り上げ、それらはみな火候を解き明かすもので、世の人々にこの未知を行わせようとしたものだ、と述べる。そしてその方法とは一般の呼吸ではなく、「此呼吸非口鼻之呼吸、乃内運一息之呼吸」という体内の気を運巡らせるという呼吸によって行われる。ここで想起されるのは全真教における「調息法」である。これについて確認しておくならば、尹志平の語録である『清和真人北遊語録』（道蔵第三十三冊）に、丘処機が尹志平らに、王重陽が馬丹陽にのみ「調息法」を伝えていたこと、そして丘処機がそれを盗み聞きし、実践していたことを述べている場面がある<sup>10)</sup>。その中で伝えられていたのは『河上公注』に基づく「調息法」であったが<sup>11)</sup>、ここでは「調息法」というよりは体内気の運搬に力点が置かれている。たとえば『河上公注』には「牝之門、是謂天地根〔根、元也。言鼻口之門、乃是通天地之元氣所從往來也〕」とあるように天地の気が体内に取り込まれると認識されているが、これに対する批判は『悟真篇』にも見え<sup>12)</sup>、王道淵は『悟真篇』と同じ立場を取っていると考えてよいだろう。

そしてそのような中で行われる火候は工夫によって1年を1月に、1月を1日に、1日を1時に、1時を1息にすることができるという。このようにして行われる過程を彼は丹が生み出され聖胎になるまでの期間を指して「符火還丹」とも述べている。

最後にもう一つ見ておきたいのは、「陰神」について述べていることである。そこでは火候に沿って修行しなければ「陰神」が生じ、聖胎である「陽神」とならないまま終わってしまうという。「陰神」については、たとえば『西山群仙会真記』において「鬼仙」を述べる箇所にある<sup>13)</sup>。

鍾曰、鬼仙者、五仙之下一也。陰中超脱、神像不明、鬼閔無姓、三山無名。雖不入輪迴、又難返蓬瀛、終無所歸、止於投胎就舍而已。呂曰、此是鬼仙、行何術用何功而致如此。鍾曰、修持之人、始也不悟大道、而欲於速成、形如槁木、心若死灰、神識内守、一志不散、定中以出陰神、乃清靈之鬼、非純陽之仙。以其一志、陰靈不散、故曰鬼仙。雖曰仙、其實鬼也。古今崇積之徒、用功到此、乃曰得道、誠可笑也。（一—三上～中）

10) 『清和真人北遊語録』には次のように有る。

「俺与丹陽同遇祖師学道、令俺重作塵勞、不容少息、与丹陽黙談玄妙。一日閉其戸、俺竊聽之、正伝谷神不死調息之法。久之推戸入、即止其説。俺自此後、塵勞事畢、力行所聞之法。…丹陽非一世修行、至此世功行已備、用此谷神之道正其時耳。故速見其驗。俺之功行未備、縦行其法、久而無驗、固其宜也。修行人、必先全拋世事、齊修万行、使一物不累、一心致虚、至寂無所寂之地、功行兼備、則福至。福至則心開、一点光明透入、即天地之根、二物自然合而為一、方用綿綿之道以存養之、使之充実、則永劫不死矣。故張平叔有云、鼎内若無真種子、猶將水火煮空鑪。（三十三—一七〇中～一七〇下）」

11) このことについては、拙稿（2021）で指摘した。

12) たとえば『悟真篇』には「玄牝之門世罕知、只将口鼻妄施為」とあり、王重陽たちの「調息法」理解とは異なったものであろう。尹志平もこの立場であった可能性も考えられるが、これについては当時の北宗の文献、または元代の内丹文献を改めて調査したい。

13) 『西山群仙会真記』については『修真十書』（道蔵第一冊）所収のものを用いた。

ここで鐘離権は陰が抜け出し、形もはっきりとせず、鬼の関所にも姓がなく、三山にも名前が無いものを鬼仙としている。帰るところもないので、最終的には胎児の中に入る。続けてどのような修行をしてしまうと「鬼仙」になるのだろうかといい、それはただ大道を悟らず、修行を早く成し遂げたいと考えるからで、結局、肉体は槁木の如く、心は死灰の如くなる。仏教徒たちはそのような方法で道を得たとしているが、まことに可笑い草だ、としている。王道淵の「陰神」もこのような考えを踏まえていると考えられよう。ただし、王道淵は『西山群仙会真記』とは違って火候を強調しており、上記の引用の最後で聖人及び祖師が火候を伝えるのは素質がある人のみとしているのは、それだけ重要なものと考えていたからであろう。

これまで王道淵の「性」と「命」の関係、及び内丹の過程について検討を行ってきた。彼は「性」と「命」は互いに補完し合うことで金丹が生じるという内丹術を説いていたことがわかる。内丹術の方法としては『悟真篇』を始めとするそれまでの内丹術の延長線上にある伝統的な五行顛倒の方法を用いていることが特徴である。また、そのような中で彼は火候に対してかなり熱意をもって説いていることがわかる。逆に言えば、内丹の修行が完成する人としらない人の差は火候にあると彼は考えていたようであり、わざわざ素質のある人にしか伝授しないとするのもそのためであろう。

では次に、祖師と仰ぐ李道純との共通点、同時代と考えられる陳致虚との共通点を述べた上で北宗との関係についても見てみたい。

## 第二章 李道純及び陳致虚の思想との関係について

前章で検討したように、王道淵の内丹思想は伝統的な五行顛倒思想をふまえ、加えて火候を重要視していた。それらを踏まえた上で、ここからは王道淵が祖師とする李道純、そしてほぼ同時代に活動していた陳致虚の内丹思想の関係を見てみたい。師とする李道純からの思想的影響は当然として、陳致虚は活動時期としては王道淵とほぼ同時代であることから、二人の内丹思想との関係を分析することで当時の南宗、引いては内丹術がどのように考えられていたのかを明らかにすることができると思われる。

まず李道純についてであるが、既に取り上げたように王道淵は自身の著作の中で李道純を祖師と仰ぐ。そのためか、李道純から影響を受けたと考えられる点が多い。たとえば、先程取り上げた修行者の段階によってランクを設けるといった点である。他にも三教についての立場である。李道純自身が三教一致論者であったことは既に指摘されているが、王道淵もその立場を踏襲する<sup>14)</sup>。たとえば『還真集』下巻に収められる「三教一理」という文章には次のようにある。

道曰金丹、儒曰太極、釈曰玄珠、矧三教之道、本来同祖、心存至德、性悟真如。闔闢機関、抽添運用、返照回光復本初。休分別、那些兒妙處、無字稱呼。虚中狀若蓬壺。寂靜形忘一也無。問三教根宗、谷神不死、靈源澄徹、誠意如愚。五氣朝元、五常合一、五眼円明燦太虚。仙儒仏、派殊而理一、到底同途。(二十四—一二〇中)

14) 李道純については、横手(1990)、李(2010)など参照。

ここでは道教でいう「金丹」、儒教でいう「太極」、仏教でいう「玄珠」は本来同じものであるとする。李道純は仏教については「円覚」や「真如」としていたが、ここにいう「玄珠」も同義と考えてよいだろう。また他にも中巻の「懲忿窒慾論」という文章に次のようにある。

在丹家則為取坎填離、水火既濟之理、在禪家則為回光返照、轉物情空之理、在儒家則謂克己復禮、正心誠意之理。以此論之、三教道同而名異、其實不離乎一心之妙也。（二十四—一〇四下）

ここで対比されるのも先程と同様の図式である。道仏儒は伝える方法は異なるものの目指す所は同じで、いずれも「一心の妙」を離れないという。このような三教の目指す所は同じであるという主張は李道純の影響下にあると考えられよう。

ただし李道純とは少し異なる点も見受けられる。たとえば李道純の特徴として精→気→神という段階を経る修養論が挙げられる。これについてたとえば『還真集』中巻「還丹秘要論」には次のようにある。

夫還丹者、乃返本還元之道也。人稟父精、母血而生、初為赤子之時、元精、元炁、元神、無不純全。及其年漸長成、蓋因眼、耳、鼻、舌四門所誘、一靈真性被色聲香味所觸、習染深。是以日復日、歲復歲、元精化為交感精、元炁化為呼吸氣、元神化為思慮神、此三元分泄、難復天真。故祖師垂言立教、載諸丹經、示人以修補之法。精損則以精補、氣損則以氣補、神損則以神補、是用返本還元之道以復之。且復者何也。以全精為深根、以全氣為固帶、以全神為妙合。世人能全此三者、實為身中真藥物也。然雖如是、若不知其運用符火烹煉之法、猶屬於陰、終不得其形神俱妙之道。豈知人道乃與天地符合、一息工夫奪天地一年造化。以乾坤為鼎器、以日月為水火、以烏兔為藥物、以陰陽為化機、以龍虎為妙用、以子午為冬夏二至、以卯酉為春秋二分。此皆法象譬喻、其實無出身、心、意三字。身係乎精、心係乎氣、意係乎神。返者、返此三者而逆行也。還者、還此三者而復真也。三全合真、乃曰還丹。（二十四—一〇二下～一〇三上）

これによれば還丹とは「返本還元之道」である。生まれたばかりの赤子の時は元精、元氣、元神が純粹なものであるが、成長するに従って習が染み付いていく。そこで精が損なわれれば精で補い、気が損なわれれば気で補い、神が損なわれれば神で補うことによって道に復することができる。そしてそれらは体の中にある藥物であり、それぞれは身=精、心=氣、意=神に相当する。そして内丹術によってそれぞれ元に戻り、融合することこそ「還丹」なのだという。李道純の修養論はこれらが別個に存在するとはせず、精→気→神という逆行する段階をたどるものであった。どうやら王道淵は李道純のこの方法を採用せず、それぞれが独立しており、それぞれが元通りに補われることが「返本還元」であり内丹術であると考えていたようである。

では、同時代に活動していた陳致虚についてはどうだろうか。陳致虚が作成した系譜を見ると、李道純の名は出てこない。陳致虚が執筆した『上陽子金丹大要』（道藏第二十四冊、以下『大要』）には白玉蟾から趙友欽、趙友欽から陳致虚という系譜が説かれているのであって、李道純らの系譜は無かったこ

とにされていることになる。これは既に指摘されているように自らの正当性を主張するものであるが<sup>15)</sup>、陳致虚と王道淵の内丹思想において共通の理解や差異はあったのだろうか。これを理解することは、元末の内丹術の展開を知る上で必要不可欠な作業であろう<sup>16)</sup>。

まず陳致虚の三教について見てみよう。『大要』卷十四「三教一家」には次のようにある。

曰、三教各門、而道則一。弟子敬受教矣、而又有一貫、一乘、金丹之道為異、敢問其名之不同歟。曰、一貫即一乘也、一乘即金丹也、金丹即一貫也。夫人皆稟陰陽二氣之全而生者也。既稟陰陽二氣、則必能變化矣。……人也者、為万物之靈也。人能久固其真也、謂之真仙、人能久存其神也、謂之神仙、人能超凡而入聖也、謂之上聖。皆不離於性命、皆不逃於陰陽、而皆出入於中心、總謂之金液還丹也。是云聖人無兩心也。(二十四-五十六下~五十七中)

ここでは三教の教えは全て同じであるとしている。人とは万物の靈であり、真を固めることで真仙となり、神を存することで神仙となり、凡を越え聖に入ることで上聖（聖人か）になることができるとする。そしてそれらは全て「性命」、「陰陽」から離れることはなく、その修養はみな「金液還丹」といえるという。これを見ても、三教一致論者であることはわかるであろう。つまりこの時期の内丹では三教一致は当然の考えであったのであろう。先程取り上げた李道純の影響もあると思われるが、このような例を見ても王道淵の三教一致的な考えも当時であっては自明のことだったのである。

次に陳致虚の修養論についても見ておこう。『大要』卷四「精神氣説下」には次のようにある。

何謂順。一生二、二生三、三生万物、故虚化神、神化氣、氣化精、精化形、形乃成人。何謂逆。万物含三、三歸二、二歸一、知此道者、怡神守形、養形鍊精、積精化氣、鍊氣合神、鍊神還虚、金丹乃成。(二十四-十六上)

これを見る限り、道教でよく用いられる修養論であることは疑いない。精から氣、氣から神、神から虚へ還ることによって金丹が成るというのは李道純も説いていた方法であり、やはり当時としては一般的だったのであろう。ただしこの方法は先に見たように王道淵の方法とは異なるものである。

また陳致虚は他にも「先天の氣」という表現を用いている。『大要』卷五「金丹妙用章」には次のようにある。

上陽子曰、金者、非云金也。指鉛以為金也。鉛乃金銀之祖、故總題為金。蓋非世上金寶之金、非從凡間土石中出者。此金乃先天之祖氣、卻生於後天。大修行人、擬太極未分之前、体而求之、即造真際。是以高仙上聖、於後天地已有形質之中、而求先天地未生之氣、乃以此氣鍊成純陽、故名曰丹。(二十四-十七中)

15) 横手 (1990) 参照。

16) 陳致虚についてはこれまで数多くの先行研究がある。松下 (2019: 291-318)、野村2003、周2019等参照。

これによれば、金はただ金というのではなく、鉛のことを指している。その理由として鉛は金銀の祖であるからだという。そしてこれは世の中にある金他からの金を指すのでもなく、地中から出る金でもなく、実は先天の祖気を指す。このような先天の気を求めることで神仙になれるのだという。つまり、天地が生じた後の形質の中から先天の気を求め、それを用いて純陽を錬成することが丹、すなわち内丹術だといっている。既に述べたように、「先天の気」という説明は王道淵も用いている。『還真集』上巻「人身三宝」には次のようにある。

先天三宝為三体 自然之道  
元精 元氣 元神  
後天三宝為三用 有為之道  
交感精 呼吸氣 思慮神

夫人身有三宝者、皆從天地中来、居先天而生、妙体混成、在後天而化、因質感合。非先天不能生後天、非後天不能成先天。此二者之理、一体而分化、不可失後損先也。是故以元精鍊交感精、以元氣鍊呼吸氣、以元神鍊思慮神、三物混成、与道合真。（二十四—九十八下～九十九上）

ここで先天の三宝として元精、元氣、元神が挙げられ、それは自然の道であるという。また後天の三宝として交感精、呼吸氣、思慮神が挙げられ、有為の道としている。そしてこれら先天の三宝を用いて後天の三宝を鍛錬し、これら三つを融合させることで道に合することができるという。また李道純についていえば、「先天の気」という概念は李道純も用いている。たとえば『中和集』卷三「金丹或問」には次のようにある。

或問、何謂内藥、何謂外藥。曰、鍊精、鍊氣、鍊神、其体則一、其用有二。交感之精、呼吸之氣、思慮之神、皆外藥也。先天至精、虛無空氣、不壞元神、此内藥也。（四—五〇〇中～下）

ここでは内藥として「先天至精、虛無空氣、不壞元神」が挙げられているが、これは王道淵のものという「先天の気」と同じであろう。このように、この時期においては「先天の気」を用いて鍊丹術を行うという公式も一般的であったのである。

以上、李道純と陳致虚との関係について確認してきた。これらを見ると三教一致飲み方や「先天の気」という概念は概ね共有されていたらしく、これらはこの時期における内丹の特徴だったと考えてよい。ただし先に見たように王道淵の修養論は李道純、陳致虚の内丹思想とは異なり、精と氣と神を融合させるという点に主軸が置かれていた。

### 第三章 全真教への理解について

最後に王道淵は全真教についてどのように取り上げているのかを確認しておきたい。既に述べたように、その著書である『還真集』の中には「祖師」という表現が出てくるものの、王重陽を始めとする北

宗の人々は取り上げられていない。つまり王道淵自身は李道純と同じく、全真教の本流とは異なった道士であり、かつ全真教とは無関係な道士であったのである。しかし、全真教という宗教集団は当然知っていたようである。著作を見てみると、その中にはいくつか「全真」という表現が出てくる。該当箇所を以下に掲げる（下線部は筆者による）。

①一氣純陽道自尊、法身隨處現全真。宝珠光裏藏天地、鉄笛聲中泣鬼神。醉卧每将山作枕、浪游常与月為鄰。他年行滿朝元始、高歩紅雲上玉宸。（「贈吳雲谷」）（二十四—一一三中～下）

②大小冥情在一軀、瑤台元始日懸珠。坤爐斡運飛金母、梵氣回旋結玉書。月照海天秋爛爛、雲收石室意如如。仙都久矣知君姓、鸞鶴來迎步太虛。（「贈全真李嗣道」）（二十四—一一三上～中）

③欲鍊金剛不壞身、三般藥物要全真。一爐水火烹煎就、便作蓬萊頂上人。（「述符火還丹妙訣八十一首」十八）（二十四—一一五下）

④不恋功名、不求富貴、不惹閑非。蓋一間茅屋、依山傍水、甘貧守道、靜掩柴扉。読会丹經、燒殘宝篆、終日逍遙任自為。真堪悅、遇饑來喫飯、冷即穿衣。箇中消息誰知。自裏面惺惺外若痴。且藏鋒挫銳、先人後己、和光混俗、豈辨高低。處世隨緣、樂天知命、白雪壺中配坎離。時來到、与十洲仙子、同駕雲歸。（「全真家風」）（二十四—一二〇中）

まず①と③について考えてみたい。『還真集』では上記の四例以外「全真」という語が見当たらないため、具体的にどのような意味なのかは掴みづらい。ただ王道淵が祖師とする李道純には「全真」という語について『中和集』巻三「全真話法」に次のようにある。

全真道人、当行全真之道。所謂全真者、全其本真也。全精、全氣、全神、方謂之全真。才有欠缺、便不全也。才有点汚、便不真也。（四—五〇一下）

ここでは全真とは本来の真を全うするという意味であり、全精、全氣、全神の3つも全真というとする。最初の意味はたとえば『莊子』雜編の盜跖篇に見えるものと同じであろう。これらを①と③に当てはめると、①の下線部は自身の体の随所に本性が現れることを言い、③については全精、全氣、全神のことを指していると考えられる。王重陽もまた「全真」という言葉を用いているが、それらも「本来の真性」を守り、生きるという意味であり、①と③もこれと同義と見てよいだろう。

続いて②と④である。②李嗣道という全真教の所属する道士に贈ったものと考えてよい。内容は内丹の修行を詠んでおり、修行の結果、内丹的な悟りを得られると詠う。ただしわざわざ「全真道士」としているのは違和感がある。既に確認したことであるが、もし王道淵も全真教に属する道士という自覚があるならば、わざわざ「全真道士」とは書かないのではないか。このような点を見ても、王自身は自らを全真教徒とは認識していなかったと見ることができると思われる。続いて④であるが、題名に「家風」

とついているので、王道淵の時代における全真教の様子を知る上で重要な資料と考えられる。これを見ると、たとえば「終日逍遥任自為」とか、「時来到、与十洲仙子、同駕雲帰」といった表現は王重陽らと共通すると思われる。ただし、王重陽の教えとは異なっている部分もある。たとえば「読会丹経」とあるが、これも既に述べたように王重陽を始めとする北宗は、基本的に經典に執着することは戒めていた。ここでいう丹経が具体的に何を指すのかは不明であるが、『還真集』には『悟真篇』や『龍虎経』、『周易参同契』の名前も見え、王道淵自身が『入薬経』に対して注釈を施していることから、これらを指すと考えてよいだろう。そうであれば、この時期の全真教は積極的に内丹經典を受容していたと考えてよい。王道淵が活動していた時期は王重陽たちからかなり後の時代であるが、この時期の全真教はかなり經典を重視した教団へと変容していたと考えられる。

これまで、王道淵の著作に見える「全真」という表現から全真教に対してどのような理解を持っていたのかについて確認した。その著作の中に全真教、特に北宗の人物への具体的な言及や賛同がない以上、彼自身を全真教徒であると判断するのは困難であると思われる。また「贈全真李嗣道」という題名を見ても、彼自身が全真教徒という自覚はほとんどなかったと考えられよう。

## おわりに

以上、王道淵の思想について検討を行った。王道淵は「性」と「命」は不可分なものであると考えており、内丹の方法については五行顛倒といった従来の伝統的な内丹理解のもと行っていた。その中で彼が特に重視したのが「火候」の過程であり、これが正しく行われないと陰神となるといほど重要なものとされた。また、その著作の中には祖師という表現が見えるが、これは李道純を指す場合が多く、王重陽を始めとする北宗の人物はほとんど取り上げられていないことが特徴である。他にも李道純はもちろん、同時代に活動していたと考えられる陳致虚との思想の共通性もあり、当時の内丹思想界ではかなり共通の基盤があったことがわかる。

これまで王道淵は全真教徒という分類がされてきたが、『還真集』の序文などから全真教徒という意識はなかったように思われる。序文の内容及びその内丹思想を見ても全真教というよりはむしろ李道純の著作に親しみ、独力で内丹を修めていた人物であるという見方が適切かと思われる。このような例は、全真教という範囲をどこまで適用するか、内丹術を行う道士を無意識的に全真教の道士として見てしまうことに対して改めて注意を要する例であろう。

## 参考文献

### 一次資料

『道蔵』（1994年）：文物出版社・上海書店・天津戸籍出版社

『中華道蔵』（2004年）：華夏出版社

### 日文

秋岡英行・垣内智之・加藤千恵（2018）『煉丹術の世界—不老不死への道—』東京：大修館書店

- 野村英登 (2003) 「陳致虚の内丹思想について」『東洋大学大学院紀要』第40号：203-216.
- 蜂屋邦夫 (1998) 『金元時代の道教—七真研究—』東京：汲古書院
- 日比野晋也 (2021) 「尹志平『清和真人北遊語録』における『道德経』注釈について」『東方宗教』134号：64-85.
- 松下道信 (2019) 『宋金元道教内丹思想研究』東京：汲古書院
- (2021) 「全真教と宋代内丹道の融合期における三乗論と頓漸論—李道純と牛道淳を中心に—」
- 伊東貴之編『東アジアの王権と秩序—思想・宗教・儀礼を中心として』：495-510 東京：汲古書院
- 三浦國雄「黄婆論—『老子』から『悟真篇』へ—」三浦國雄・堀池信夫・大形徹編『講座道教第三卷 道教の生命観と身体論』：155-178. 東京：雄山閣
- 横手裕 (1990) 「全真教の変容」『中国哲学研究』第2号：23-93.
- (2005) 「道教における「本然の性」と「気質の性」—二つの「性」と「神」をめぐって—」 麥谷邦夫編『三教交渉論叢』京都：京都大学人文科学研究所：263-288.

#### 中文

- 胡孚琛主編 (1995) 『中華道教大辞典』中国社会科学出版社
- 李大華 (2010) 『李道純学案』齊魯書社
- 張広保 (1995) 『金元全真道内丹心性学』生活読書新智三聯書店
- 張曉粉 (2003) 「論王道淵の南宗道教思想」『四川大学学報 (哲学社会科学版)』第125期：140-144.
- (2008) 「全真道士王道淵的“道論”与“人論”」『四川師範大学学報 (社会科学版)』第三十五卷第五期：48-53.
- 周治 (2019) 『上陽子陳致虚生平及思想研究』邑蜀書社

#### 欧文

- Schipper, Kristofer and Verellen, Franciscus (2019) *The Taoist Cannon VOLUME 3*, University of Chicago Press